三成は、サスガに政治家であつて、大局に通じてゐた、もちろん秀吉も、そのつもりで、渡航の準備をした。彼の麾下、小姓等まですでに乘船した、もう彼は出發するばかりになつてゐた。その出發まぎわになつて、德川家康と、前田利家が諫止した。

『殿下の親征は、恐懼に堪へない、是非とも止まりたまへ』

特に、家康は力說した。

『ともかくも、それがしと利家とをやつてもらひたい、御命のまゝに働きませう、六七月は海上の荒い時である、もし殿下に萬一のことがあつては、天下は忽ち瓦解するであらう』

この家康の諫止がきいて、太閤は一まづ渡航を中止した。

◇

家康、利家には大局が分らない。二人のいふところは平凡な常識である。つひにこの常識にあやまられて、太閤は大明征略を永久にミスしてしまつた。それより以後、足かけて七年、戰つたり、媾和したり、遠征軍を引きあげて見たり、再度遠征軍を出して見たり、結局大明側の遷延策

にずる〳〵と引きづられて、何の得るところもなくして終つた、鐵は灼熱したときに打つべきである。太閤はつひに灼熱してゐる時に、鐵をうつべき事を躊躇したのである。そして冷却してしまつてから、鐵を叩いてみてもつひに精良なる鍛鐵とはならないのである。ひつきよう叩疲れてミジメにもヘコたれてしまつた、まことに殘念なことであつた。

◇

朝鮮役の失敗は、この五月十八日の教書以後、燃えさかつてゐた太閤の渡航熱が冷却した六月頃、すでに完全にその萠芽を發生したといつてよい。

だから大陸遠征軍のその後の進軍狀態や、明の李如松との戰や、清正が北韓から會寧において二王子を生鄒し、今日の滿洲に進軍したすさまじい勢ひや、碧蹄館の戰ひや、一進一退はあつたが、名護屋の本營における決心が、この狀態であつたから、捗々しく進捗しなかつた。

翌年四月、明の媾和使が名護屋に來た、それが歸國の途についたのは六月末であつた。その媾和條件は大明皇帝の賢女を迎へて日本の后妃とすること、朝鮮八道を分割してその四道および國

城を朝鮮國王に還すべし、明國との間に官船商船の往來すべきことなどであつた。一年前の大唐に行幸を仰ぎ秀次を唐の關白にするといふ抱負に比べて、可なり讓歩したものである。しかし堂堂としてあくまで國威を發揚する意氣は十分であつた。

◇

しかるに一面、小西行長、石田三成等と、沈惟敬の間において、太閤には內密で、媾和の內談が進められてゐた。それが封王入貢の密約であつた。行長の祕書如安は明使に從つて北京に行つたが、抑留さること十八ケ月の久しきにおよび、散々明の朝廷に弄弄された。この間に吾が外征軍は朝鮮を引き揚げて、媾和のなりゆきを待つてゐた。如安の屈辱的和議が成立して、文祿四年正月、明主は冊封使を日本に送つた。しかしその冊封使は釜山につくまでに四ケ月、それから堺へ來るまでに七ケ月を費し、結局文祿五年九月、地震後の伏見城に、秀吉に謁見したのは一年後のことである。つまり、媾和使の往復だけに三年有餘を費したのだから、いかに馬鹿々々しくのんべんだらりのものであつたかゞ想像されよう。

◇

冊封使の結果は、結局秀吉を怒らせ、明使を追ひかへして、再び大陸遠征軍を送ることゝなつた。

秀頼生る

太閤の母、大政所は、文祿元年七月廿三日、八十餘歳の高齡をもつて逝つた。孝心深い太閤は諸山諸社に祈願した、母の命を一年延長したまへ、一年が叶はずば半年でもよし、三月でもよしと祈つた。そして名護屋の本營から京都へはせ歸つたが、つひにその死目に逢ふことができなかつた。八月、高野山に一寺を建立し、寺領一萬石を寄附して、母の冥福を祈つた。優しい人の子としての情愛をもつた秀吉であつた。

◇

翌文祿二年八月には秀賴が生れた。大政所の死に對して狂せんばかりに悲しんだ秀吉は、秀賴の誕生にはまた、狂せんばかりに喜んだ。さきに鶴松を喪ふて、今秀賴を得たのである。もはや自分に實子はないものとあきらめてゐたのが、秀賴の誕生によつて希望と歡喜とが潮のごとく彼にこみあげてきた。ほんとうに天から授けられた子だからで、まるで拾つたような子だからである。そこでこの子を『ひろい〳〵』と申すべく候、おひろいと呼ぶんぢやない。たゞ『ひろい』とよべと命じた。四十二の厄年に子を生めば、一旦棄てゝ人に拾つてもらふ習慣がある。秀吉はそれを眞似て『ひろい』と命日したのである。だが、いつのまにか可愛さのあまり自分の禁を破つて『おひろいさま』と稱して喜んだものである。

◇

この秀賴出生によつて、中心ひそかに打擊を蒙つたものは、關白秀次である。秀次はみづから疑惧と不安に焦慮した揚句、ひそかに天下の大名を募つて陰謀を企て、つひにバクロして高野山に自殺した顚末は、すでに述べた通りである。

とにかく、太閤秀吉は、家庭的に不仕合せな人であつた。其身邊は一生淋しかつた、豐かな情愛を血緣の人々によせて、何くれとなくしんみに世話もし、面倒も見、可愛がりもしたが、いづれもモノにならなかつた。今はたゞ秀賴の『おひろいさま』だけが、唯一人のもつとも親しい血緣者である。しかしもう太閤は五十八歳といふ晩年に生れたひとり子である、前途を思へば落寞として、うたゝ遼遠の感に堪へない。

◇

淀君は、はじめ九州名護屋の陣營で姙娠し、京都へ歸つて秀賴を生んだのである。秀吉はあらかじめ松浦讃岐守に、その產れるを待つて直ちに遺棄し、松浦をして拾はしむべく命じて置いた。生れたコドモは、かくして健全に成長するといふ迷信に從つたものである。そのためでもあるまいが『おひろいさま』はとにかくすく〳〵と成人した、秀吉にとつて、それが何よりのたのしみであり、何よりの力である。枯れ落ちんとする彼の氣力は秀賴の生誕に勵まされて、さらに一段の飛躍と、緊張と、努力とを見たことであらう。いふところの『落日の莊嚴』は、最後の花々し

い光焰をあげて、一段の急旋轉をなしたことであらう。

◇

江州湖北の小谷は、淺井長政の居城で、今も小谷村の史蹟保存會では、城跡を保存してゐる。そこには虎姫山の一角に信長丸があつて、淺井と織田が政略的な親近をつゞけてゐた時代の面影が偲ばれる。信長の妹お市どのが、美人として長政に嫁ぎ、そこで三人の娘を生んだ、その惣領娘がお茶々で後の淀君である。太閤秀吉は、まだ若き血に燃ゆる三十五歳頃から三十八歳までの時代を、湖北地方小谷城の周圍にあるひは戰ひに、あるひは和し、心ひそかに長政の夫人お市の方に思ひをよせてゐた。湖北の山々に雪が消えて、櫻の花のほころびるけふこの頃、秀吉がこのわたりを徘徊してゐたことを考へると、四百年前の昔語りが、つひ昨日今日のことのやうに思はれて、歴史の思ひ出に、怪しくうつとりとなるのである。そして小谷山の麓にある小谷寺のさくらの花が、今さかりに爛漫と咲き誇つてゐるのを思ふて、記者は暗然とするのであつた。

醍醐の花見

江北小谷の城主淺井長政は、信長に滅ぼされたけども、信長の令妹お市の方との間には、美しい三人の娘を遺して行つた。お市の方は小谷落城ののちは、三人の娘を連れて清洲へ歸つてゐたが、天正十年、信長がなくなつた年の秋、柴田勝家に再嫁した。翌十年には勝家の北の庄城は秀吉に攻め落され、お市の方は勝家とゝもに自害して燒けうせ、三人の娘たちは、秀吉の手に渡された。その長女お茶々が淀君であり、次女は京極高次の夫人、三女は二代將軍德川秀忠の御臺所である。國滅びて山河あり、城空しうして美人なほ依然として遺るといふのは、おそらく淺井長政のこの三人の娘たちの上のことであらう。

◇

幸運か、薄命か、とにかくお茶々の淀君は幼少にして小谷城落去の悲運に會し、やうやくもの

こゝろのついた頃には、再度、越前北の庄落城の焔をのがれて辛うじて生きのび、三たび大阪の落城に最後の運命に臨んだのである。一生に三度までも、落城の焔に見舞はれたのは、珍らしいことで、よく〳〵の運命であつたと思はれる。

◇

小谷寺は、小谷城の麓にあり、同寺は神龜年中の開基で、本尊如意輪觀音は神佛であるが、寫眞によると純然たる白鳳佛で、たゞその衣紋が白鳳、推古時代のどれにも見出さない複雜な裝飾線が入つてゐて、かつて先例がないといふので、國寶には編入されてゐないが、形式は純粹の白鳳佛である。古來、山上にあつたのを、他の六坊とゝもに淺井長政の時代に、山下に追はれたのだといふ、山は安土山よりも高く佐和山城よりも複雜で、前後三段に、層々として次第に高く聳えて、その間に本丸二の丸はもちろん、金吾丸だの、六坊跡だの、山全體に點々として史蹟が點在してゐる。

◇

私は、春の一日、そこを訪ねた。村の入口に、とく〳〵と吹き出づる清水の井戸を見て、わが秀吉はこの清水に喉を濕ほしたかも知れないと思ひ、信長の妹お市の方が尾張から嫁入つて來てこのわたりの春をまちかねて、菜の花のさく頃を、いかに喜んだことかと考へたりした。ことに後年、大阪落城によつて薄命を惜しまれた淀君が、この江北の出生であつたことを考へ、一代の英雄秀吉との間に結ばれた情緣の不思議さを考へて、人間の悲喜こも〴〵複雜な一生を省みるのであつた。

◇

とにかく、太閤は秀賴のためにいかに安全に天下を保持しようかと、その事のみに心を傾けた。豐臣一家が安泰であるならば、たとひ攝津一ケ國だけでもよいと、秀賴のために考へた。晚年における豐太閤のこの心づかひは、常識を超越して、全く愚にかへつたと思はしめるほどの愚痴であつた。人の親のこゝろは、こんなにもその子に對しては愚かさの限りを盡すものだと、いふことを吾々はこの英雄の心事の中に發見して、まことに淋しくならざるを得ない。

◇

慶長三年三月十五日、太閤の有名な醍醐の花見の一日である。當日は醍醐三寶院を修理して館舍となし、院外五十町四方を構内としこれに柵をめぐらし、五色の幕を張り、三町ごとに警固の士を配し、伏見から醍醐に至る道路の左右にもまた柵を結んで五色の幕を張り渡した。福島正則と、增田長盛は柵外の警備に當らせ、山中山城と中江式部には、構内出入のものを監視させた。

まづ一番のかごには北政所、續いて二番には三條、三番に松の丸、四番に太閤および秀頼、五番に淀、六番には加賀（利家夫人）といふ順序で入場したかごが醍醐に着するや、儀仗の諸將諸兵は、悉く場内を去らしめ、全く家族たちの園遊會場にしてしまつて、一日を悠々と遊びくらしたものである。

太閤病む

太閤の醍醐の花見は、絢爛にして華麗、いかにも屈托のない、太閤らしい花見であつた。太閤は秀頼の手をひいて、そこ〻と逍遙した。益田長盛の數奇を凝らした茶寮が、濃艶な花間に、閑寂尙古の色を浮かべて彼をまつてゐた。太閤はそこへ立ち寄つて一服を喫した、それからかごにのつて山頂に志した、新庄雜齋や、小川土佐守の茶寮もある。岩窟を一大旅館につくり、太閤父子はもちろん、北政所や、諸嬪の室まで、ことごとく別棟にしつらへて浴場まで準備してゐる。これは益田長盛の苦心慘澹して、太閤一日の清遊を慰さめんがために營んだところである。氣の輕い太閤は、さつそく裸になつて一浴を試み、浴後、食膳に舌つゞみをうつた。

◇

庭には遣水が流れ、それには小舟に人形をのせ、岩にあたつて激しく驚けるさまなどが造られてゐる。六歳の秀頼の目をたのしませるための趣向であつた。

前田玄以の亭に立ちより、長束正家の模擬旅館で日がくれてゐた太閤は、そこで饗膳を出させて、諸嬪や侍女たち一同と晩餐をしたゝめた。

日がくれて、灯が入るとゝもに夜の花は一入光彩を發揮する、柴垣をしつらへ、竹の編戸をもつた掛茶屋に立ちよつて、太閤は燒餅一個を頰張つたが、いづれも二十歳前後の茶屋賣店の娘たちに、左右からおあしたまはれと、代金を請求して離れないのに、いたく興を催し、それではおあしをやらうと、再び茶店に入つて腰を据ゑ、俄に酒宴を開いた。

目出たや、松の下、千代も幾千代も、ちよちよ

女房たちの小唄である。

◇

さうした爛漫たる醍醐の花見をすぎて間もなく、新綠初夏の頃からであらう、太閤は病氣になつた。いよ〳〵病床についたのは、六月であつたが、外征十萬の師を朝鮮に出してゐる際のことではあり、內外の混亂は容易ならぬものがあるので、太閤みづからの心配は非常なものであつた。太閤は自分の病氣が、とうてい回復の見込みがないと知るや、遺命と遺言と、諸將の誓書交換とで、その病床は多忙であつた。

◇

外征十萬の軍を無事に引き揚げしめること、諸將を和睦せしめて豐臣家を全うせしめること、この心づかひが、太閤の病中を始終支配してゐた。淺野侯爵家に傳ふる『太閤樣被成御煩候內に被爲仰置候覺』といふ文書がある、太閤が病中に遺言として云ひのこして置いた條々の覺書である。

それによると、第一、德川內府は律義で、近年は懇意であるから秀賴樣を孫むこになされるやうとの依賴である。秀賴のために秀忠の娘を貰ひ、つまり家康には孫むこの關係をして秀賴を取立てんことを依賴した。

第二條は、前田大納言利家は、太閤のおさなともだちで、りちぎの人物であるから、秀賴樣御もりとして、御取立を請ふ旨を依囑した。以上いづれも家康、利家、五奉行を列坐せしめての依囑である。

第三條は江戸中納言殿（德川秀忠）は、秀賴のしうとになされたのであるから、內府（家康）

も年をよられ、面倒だらうから、内府のごとく秀頼様へきもいりを依頼する旨、皆の衆のゐるところで言明した。

第四條は羽柴肥前守殿（前田利長のこと）は大納言殿（利家）も年をよられて、面倒だらうから、相變らず秀頼様のおもりをたのむといふのである。

第三、四は、家康の息子秀忠と利家の長男利長との二人に、父同様、秀頼のことを依嘱したので、いかに愛兒のために、心膽をくだいたかは、その用意の周到さによつても想像することができる。

夢のまた夢

さらに備前中納言浮田秀家は、太閤の養子になつてゐたのであるから、秀頼とはのがれぬ關係にある。太閤はそこを押へて、秀頼のために將來は五奉行の一人ともなり、諸職おとなしく、ひ

いき偏頗なしに肝煎るよう遺言した。上杉景勝、毛利輝元にも秀頼のことを依頼した。そして五奉行には、もし御法度に背くものがあつた場合には、さげさや（提鞘）の體にて双方へ意見し、たとひ不屈至極に切りかけられても、面をはられても、草履を直しても、みんなこの太閤への追腹と思ひ、太閤に切られ、毆られたのだと思ひ、太閤に草履を直すのだと我慢して、決してコトを荒立てるなと遺言してゐるのである。

◇

伏見には、徳川家康を置いて、天下の政務を見ることゝし、大阪城には前田利家を置いて秀頼身邊の惣まわりを處置すべく依嘱した。そして城の留守には前田玄以、長束正家を命じた。城の天守は一城の眼目、精神で、城外の何人といへども天守樓上にのぼせぬものであるが、太閤は徳川家康、前田利家の二人には、いつ何時、天守に登らうといつても、氣づかひなく上らせるようとの遺言をしてゐる。

◇

この遺言と前後して、七月十五日、諸將は前田利家の邸に集まつて五ヶ條を血誓した。秀頼に仕ふること太閤に仕ふるが如くすること、豐家の法制に違背せずなどである。さらに八月五日、家康、利家および五奉行が八ヶ條を誓約した。八月七日には三成等五奉行が親類の縁を結んで、同心協力秀頼を助くることなどの誓書を奉つた。八月八日には徳川秀忠、浮田秀家、細川忠興等も十ヶ條を誓約し、同じ日、家康、利家の二人もまた三ヶ條を誓約した。すべて太閤の遺命を忘れず、秀頼に忠實に仕へるといふ誓詞なのである。

◇

太閤の病を押して、八月五日、みづから筆をとつて、五大老に書き送つた、有名な最後の遺書がある。いはく、

秀頼事成立候樣に、この書附衆しん頼み申候、何事も此外には思ひ殘す事なく候かしく、返々

秀頼事たのみ申候、五人の衆頼み申上候、名ごりをしく候

哀切、悲壯をきはめ、言々句々秀吉が泣いてゐるのである。五人の衆とは、家康、利家、輝元

景勝、秀家の五大老である。

◇

八月八日、前田利家が見舞ひにやつて來ると、太閤は病ひの篤きを忘れて床を起き上り、利家の手をとつて、頭上に戴き

秀頼のこと頼み申すぞ、大納言、大納言。

とくりかへし依頼した、そして太閤は潸々として涙のつくるを知らず、利家の手を握つて泣きつゞけたものである。

八月十六日には、また〳〵四大老を招集して、秀頼のことをたのみ、十七日から昏睡狀態に陷つて、つひに十八日午前二時ごろ、伏見城にその華やかな一生を終つた。

喪を祕して、八月二十九日夜ひそかに洛東阿彌陀ヶ峰の麓に埋めた。柩を護つてゆくものは、僅かに增田長盛一人であつた、いかに太閤の死を祕密にしてゐたかゞ想像されるであらう。朝鮮征伐軍がこと〴〵く凱旋した後に、その喪は發表され、てうど半歲後の慶長四年二月十八日、葬

儀は行はれた。葬儀場は洛東大佛殿の東に假堂を設け、行列は三萬人、伏見城を出て、大和大路を北へ、七條通りを東へ、大佛の祭場殿へ到着し、木食眞山上人を導師としてとり行はれた。

露とおち露と消えぬるわが身哉なにはのことは夢のまた夢

かぬて生前、用意して置いた辭世の一首を、いよ〳〵いけなくなつてから、筐底から幸藏主にとり出させて一座に示したのがこれである。

人間の哀史

太閤薨去の後、大阪落城に至る豐家の沒落史は、まことに人生傷恨の限りで、涙なくしては語り得ない人間の哀史である、これは花やかなりし落日の、落ち去つたのちの暮天の淋しさが、いづくまでも餘波をとゞめて、綿々として盡くるところを知らない感じである。

◇

豐鑑は、竹中丹後守の刺史、源重門の筆を取つて書いた豐公傳記で、もつとも信用を置くべき豐公傳の一つとされてゐるが、大阪落城後、僅かに十六年を隔てた『寛永八年秋八月、東武江戸にて筆をすゝぎぬ』と擱筆の年月を記してゐるのであるから、太閤の死後から、大阪陣に至る間の消息を、まのあたり十分に見聞してゐたであらう、けれどもそれらは憚かるところありと見えすべてをカンタンに省略してしまつてゐる、すなはち、

元和元年五月八日、家康公のために、攝津國大阪の城にて自害し、けぶりとのぼり給ひにしかば、豐臣氏あとなく成にけり

で、アツケなく終つてゐる、しかしそれでも彼の心の底に湧きかへる豐家沒落に對する哀感は、押へても、押へ切れぬものがあつたと見え、

殘しをく筆の跡さへ末とげであだに消にし秋のゆふづゆ

と、一首の和歌で、その著述を結んでゐるのである。

◇

げにや、殘しをく筆の跡さへ、結末をうまくなしとげることの出來なかつた著者として遺憾を、つくづくとかこち、秋の夕露の、あだに消えにしうらみを、歌に託して紛らせてゐるのである。もともと太閤なきのちの天下は、もつとも自然な必然さをもつて、徳川家康に歸すべきことは、內外のあらゆる情勢から見て、やむを得ないことで、それは歷史の必然である太閤自身は、心の底ではこの必然性をしつかりと認つめながら、なほかつ、やむにやまれぬ愛兒秀頼への恩愛にひかされて、死の最後の刹那まで、あらゆる盲目的な努力をもつて、秀頼の覇權を保持するために甲斐なき苦鬪をつゞけた、それは人情のしからしむるところであると、カンタンに片付るわけにはあまりにも大きな人間の盲目的愛情であつた。そこに英雄豊公の深い人間性がある。

◇

しかし太閤のかうした、せつかくの努力にもかゝはらず、彼が伏見城中に、永遠に開かぬ最後の瞼を閉ぢたその刹那から、悲劇は刻々に芽生え、成長した。百千の誓詞は破られ、誓言は蹂躙せられ、遺囑は閑却、放棄せられた、太閤恩顧の大小將士の心は、水の低きに流れるごとく、徳

川家康に流れた、太閤が豊臣一家を永久に持續したく念願したように、彼の麾下の大小名も、また銘々、一家の幸福を持續するための、唯一最善の方法として、家康の前に頭を下げざるを得なかつた。加藤清正、福島正則ですら、この大勢の前には從順であつた、ひとり孤憤を抱いて慨然として、太閤のために關ヶ原の一戰を戰つた石田三成のみが、太閤が病床における最後の盲目的苦鬪の感情に對する唯一の理解者であり、かつ實行者であつた。

◇

しかし、人間、頭をめぐらせばこれ神仙である。太閤は、辭世の和歌において、彼自身の神仙超脫の一面を示してゐる。

露とおち、露ときえぬる、わが身かな、なにはのことは、夢のまた夢

かの桃山時代を劃するところの豪快にして菱麗なる時代の建築、美術、工藝、裝飾一般をのこした太閤も、それらを露と見、夢と觀「夢のまた夢」と感じたところに、英雄豊公の人生觀がある。

太閤の時代

一言にしていへば、室町末期から、織豐時代へかけての、吾が日本國内の、思想的動向は、たゞ『下剋上』の時代であつた。現在の日本が、至るところに『下剋上』の傾向は表はしてゐるように、太閤の時代は下剋上の時代であつた。信長が足利義昭に取つに變つたのもそれである。明智光秀が信長に反逆したのもそれである、秀吉も主人信雄、信孝を追ふて、織田氏の覇權を自分の手に收めたのもそれである。そしてその最後は、ヤハリ德川家康のために取つて代られたのも『下剋上』の時代精神のあらはれであるといつてよい。

この下剋上の時代精神は、また力のものをいふ時代である、その當時の力を代表するものは武力である、武力のあるところに金力も集まつた。太閤秀吉の天下統一は要するに武力的統一であつて、同時に黄金力の統一、すなはち經濟的統一も從つてそれに附隨して行はれた、さうした力による英雄の覇業時代が、秀吉に至つて大成された、秀吉は其意味では、實にアタリヤで、成金的英雄であつた。

◇

すでに太閤は、戰國の末葉を終末づけた成金的英雄であつたからその行ふところ、なすところは、すべて豪華、絢爛、人目を奪ふばかりの花々しい花美を好むだ。室町時代の寂と澁味をもつた古淡さから、桃山時代の燦爛たる『金色莊嚴の時代』が、秀吉によりて開展された、室町時代は、色彩のない墨繪の流行した時代であつたが、秀吉の豪奢をこのむ成金的な趣味から、急に、花やかな色彩美の時代が開けた、この金色莊嚴の時代、色彩美の時代が、いふところの桃山時代の特色であつた。そしてこれは太閤秀吉の性格であり、その性格から生れたこのみであつたのである。

◇

美術史家のいふところの桃山時代は、僅かに前後三十年であつたが、この三十年の短い期間に數百年に相當する他の時代に匹敵してすこしも劣るところのない燦然たる文化を打ち樹てた。それがたゞ一人の豐太閤の力によつて推しすゝめられたのであるから、いかに彼が大きな事業を日本文化の上に遺したかゞ分るであらう、つまり建築と、繪畫と、彫刻と、工藝と、あらゆる方面において、英雄秀吉の生活は、そのまゝ躍如として現れた、これは實におどろくべき偉大な業蹟であつたといはねばならぬ。

◇

信長の安土城は、この意味で、桃山時代の先驅をなすべき劃紀的な、豪壯な建築であつて、金瓦をのせ、金壁を塗り、室内の襖には狩野永德が、雄大、奔放な筆を揮つた。惜しいかな安土城は、燒けほろびて、當時の善美をきはめた壯大な結構をしのぶよすがもない。しかし、秀吉は天正十一年から、大阪城を築き、皇居を造營し、京都に聚樂第とよぶ邸宅をつくり、文祿三年には伏見城を築いた。その他神社、寺院、大小の築城など相ついで土木建築の事業を行ひ、そのため

に繪畫、彫刻、州藝などの美術は、見る〳〵非常な速度をもつて發展し、進歩して行つた。そこには成金氣分といふ意味も、もちろん、十分に横溢してゐたが、しかし自由の天地と、創造の天地とが、過去のあらゆる傳統を脱却し、活々と動いた、すなはち積極的な活動時代が、すべての過去の沈滯を破つて人心を新たにした。しかもその割造と自由とは、勢ひ一種のルネッサンスを伴つた、それでこの時代の藝術は、復興主義とよばれる活潑な意味をもつ。

◇

金粉を壁土に振りまぜて大阪城の城壁を塗つたので、遠く望めば金色燦然として輝やくといつた壯觀は、實に秀吉の豪宕、雄大な氣魄を、まのあたりに見る心地がする、秀吉はさうした『落日の莊嚴味』をもつた人物だつたのである。

趣味の一面

天文十五年十月一日から、十日間にわたつて北野の茶會を催した。これは九州征伐の凱旋祝賀を、民衆的に行ふための催ほしであつたが、その年の八月二日から洛中洛外、奈良、堺にいたるまで茶會主催宣傳の高札を立てゝ、民衆の參加を求めた、太閤秀吉の民衆的な性格を知るには、もつともよい一つの適例である、その高札にいはく、

「來る十月朔日、北野の松原において、茶の湯を興行せしむべく候、貴賤によらず、貧富にかかはらず、望みの面々、來會せしめ一興を催ほすべし、美麗を禁じ、儉約を好みて營み申すべく候、秀吉數十年來もとめ買ひし諸道具、かざり立てをくべきの條、望み次第、見物すべく候也」

◇

秀吉數十年來求め置きし諸道具をかざり立てゝ、自由に民衆に展望せしめやうとするところに太閤の自慢があつた。これによると太閤の美術趣味、骨董趣味、茶道具趣味といふものが、すでに數十年來も持續して、相當、道具を求めて置いたことが想像され、その邊から考へても、秀吉

が決して武骨一片の野暮天でなく、相當、趣味性のひろいことを誇りとしてゐたことがわかる。この趣味性が、桃山時代を創造するところの美術を生むに至つたものと考へられのである。

◇

北野の大茶會では、秀吉は三室に、自己の所藏品を陳列して、茶人を垂涎せしめた。その道具の目錄の四、五を擧げると、こんなのがある。

青楓、長そろり、虚堂墨跡、井戸茶碗、かねての水さし、折ための茶杓めんはく(四方盆に居)にたり、紹鷗天目、あらみ茶杓

七ツ臺、そろりの花入、瓢簞、朝山、備前筒の花入、四十石

足利氏の末葉から、豐臣時代における茶莚の驕奢を語る、すべての珍什が、展觀されたのである。

◇

しかし、茶の趣味とは、全く反對の莊嚴、華麗な桃山時代の豪華な繪畫、裝飾が、秀吉によつ

て大に展開された、永徳と、山樂の二人が、その時代の障壁畫に、革命的な豪快な花やかをもつて、大膽奔放な筆を揮ふた。

◇

秀吉はまた歌にも趣味があり、好んで和歌をよんだ、歌人としての雅號に『松』といふ一字を用ひた。

聚落第への行幸を仰ぎ奉つたとき、歌會が催されたが『松によせて祝ふ一といふ題で、かしこくも後陽成天皇の御製。

わきてけふまつよひあれや松が枝の代々の契りをかけて見せつゝ

と、遊ばされたのは秀吉の雅號『松』を思し召されてのことかと拜察される。この時、秀吉は、

萬代の君が行幸になれなれん綠木たかき軒のたままつ

と、詠んだ。

◇

聚落の行幸は、三日間の御豫定が、あまりの御滿足と、御感興とで五日間に延びた。主上は、御滿足のあまり、

萬代にまた八百よろづよを重ねてもなほ限りなき時はこの時

と、御機嫌斜めならず、秀吉も大に面目をほどこし、直ちに一首の歌を奉つた。

ことのはの濱の眞砂はつくるとも限りあらじな君が齡は

君臣の情、豐かに濃やかであつた面影が偲ばれる。

◇

太閤は筆蹟も見事であつた、文事にかけても修養と努力とをもつてその天分に磨きをかけた。

（完）

昭和十年六月六日　第一刷印刷
昭和十年六月十一日　第一刷發行

春秋文庫第四部＝3　隨筆豐太閤　【定價壹圓錢】

著作者　小林橋川　東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行者　神田龍一　東京市麴町區土手三番町二十九番地
印刷者　谷口熊之助　東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行所　春秋社

發賣所　東京市日本橋區吳服橋二ノ五
松柏館書店
振替(東京)三九七一六電話日本橋二六二四

製本所・植木製本所

春秋文庫・第二部

(1) 相馬御風著 一茶と良寛と芭蕉
(2) 相馬御風著 貞心と千代と蓮月
(3) 荻原井泉水著 旅人芭蕉
(4) 荻原井泉水著 旅人芭蕉
(5) 荻原井泉水著 芭蕉の自然觀
(6) 荻原井泉水編 尾崎放哉俳句集
(7) 荻原井泉水編 芭蕉選集
(8) 野口米次郎著 放たれた西行
(9) 荻原井泉水著 「奥の細道」通說
(10) 上野松峯著 詩に瘠せた芭蕉
(11) 相馬御風著 良寛坊物語
(12) 荻原井泉水著 芭蕉と一茶
(13) 江原小彌太著 出家良寛
(14) 高濱虛子著 現代俳句評釋
(15) 荻原井泉水編 俳人讀本(上卷)
(16) 荻原井泉水編 俳人讀本(下卷)
(17) 相馬御風著 曙覽と愚庵
(18) 吉江喬松著 自然讀本(春)
(19) 吉江喬松著 自然讀本(夏)
(20) 吉江喬松著 自然讀本(秋)
(21) 吉江喬松著 自然讀本(冬)
(22) 吉江喬松著 自然讀本(自然美論)
(23) 成瀨慶子著 寂光の人蓮月

646
7

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black